

Title	〈書評〉川井ゆう著『迫真の境地実物どおりに着彩された等身大の人形の歴史〈欧米編〉』
Author(s)	青木, 美保子
Citation	デザイン理論. 2004, 45, p. 84-85
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53114
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

川井ゆう著

『迫真の境地 ― 実物どおりに着彩された等身大の人形の歴史〈欧米編〉―』

ふみづき舎 2004年 477ページ

青木美保子／京都光華女子大学

本書は、本誌 No. 38に掲載の学術論文「江戸時代から現代において人形師はどんな等身大人形を作ったのか」の著者・川井氏の、その後、視座を日本から欧米へと移しての研究成果である。

限定200部非売品の本書の発行には、著者が「実物どおりに着彩された等身大の人形」を調査された際、日本各地の人形師の方々の協力を得ることができ、その方々に対するお礼と応援の気持ちが大きな要因としてあるようだ。

しかし、「お礼」は分かるが、なぜ「応援」なのか。それは、日本の「実物どおりに着彩された等身大の人形」に対する著者の深い思い入れに依る。その評価の低さは、欧米の価値基準に影響されたものであるとして、欧米の低い評価成立の経緯を辿るべく「実物どおりに着彩された等身大の人形」とその「製作者」に纏わるエピソードを、時代を追って丁寧に調査され、結果として、日本の「実物どおりに着彩された等身大の人形」の評価が不当であることを確信しての上梓なのである。

全体は12章から成るが、以下のように、時代に沿って、5部構成となっている。

第1部：王のふたつめの身体

第2部：医学と宗教アルプスの北と南

第3部：切り裂かれた女神（18世紀）

第4部：美術の勃興と医学の分化（19世紀）

第5部：抽象と具象のはざま（20世紀）

以下、各部の内容を簡単に紹介したい。

第1部は「実物どおりに着彩された等身大の人形」のルーツから始まる。フューネラル・

エフィジー、つまり遺体の代理としての人形がそのはじまりであった。フューネラル・エフィジーは、葬儀での必要性から発生し、技術の向上によって写実性の高い蠟人形となるが、その役割はやがて「見せる」エフィジーへと変化していく。第1章ではイングランドを、第2章ではフランスを中心に、14世紀頃から17世紀初頃までのフューネラル・エフィジーの変遷が、多くの王侯貴族に纏わるエピソードを交えながら辿られている。

第1部がアルプスの北側を舞台とした話であるのに対し、第2部ではイタリア、スペインを中心とした南側の、製作者達の動向に焦点が当てられる（著者によると「製作者」は、「つくる人」を意味し、「職人」や「人形師」を使用しないのは語彙によるイメージの影響を避けるための配慮である）。北側と南側では16世紀までは、死に対する考え方の違いから、「実物どおりに着彩された等身大の人形」の需要と発展の仕方が異なっていたが、16世紀中頃、アルプスを越えての技術交流が盛んになり、次第にその違いが無くなっていった。

第3章では、早くから人体解剖が行われていたイタリアでの状況が記されており、レオナルド・ダ・ヴィンチとミケランジェロの解剖模型の製作に纏わる話も興味深い。

第4章では、解剖学が発達したイタリアの製作技術が、ヨーロッパ中に広く伝播し、「実物どおりに着彩された等身大の人形」は、いろいろな役割を持って需要されるようになった様子が分かる。それは、解剖模型として、奉納細工として、あるいは記念像としてであり、さらにそれらは博物館の資料にもなった。

第3部では、第5章のタイトルにもあるように「医学的見世物」として蠟製の解剖模型が庶民の目に触れるようになった様子が多くの事例によって示される。解剖模型を携えた「移動博物館」はヨーロッパ中の庶民に医学的知識を啓蒙した。

第6章では、産科学的解剖模型である「胎内十月」や「フローレンティン・ヴィーナス」を中心に、解剖模型の技術が発展し多くの博物館や大学において解剖模型が展示されていた様子が分かる。そして国の支配者の中には解剖模型を展示する博物館を建設する者もあり、18世紀の「実物どおりに着彩された等身大の人形」は解剖模型として、庶民だけでなく学者や王侯貴族からも興味を示され、高い評価を受けていたのであった。

第4部は、第7章で、鑑賞の対象としてあった解剖模型が、19世紀の科学の発展とともに、医学の教材として特化したことで、美しさが排除され、より合理的な色・形となって医学の世界で普及していったことが分かる。一方、第8、9章では、「実物どおりに着彩された等身大の人形」は医学的啓蒙の役割に加えて娯楽的役割を持って、博覧会、蠟人形館、博物館で活躍した様子が、ヨーロッパ各地の事例によって示される。娯楽性の度合いの増した「実物どおりに着彩された等身大の人形」に対して、19世紀前半の肯定的評価から19世紀後半には批判的評価が増加する。この評価の変化が大きな転機であり、著者が不当とする評価の原点でもあるようだ。

第5部は、第10章で、20世紀において「実物どおりに着彩された等身大の人形」が衛生博覧会と衛生博物館で活躍する各地の事例が記されている。一方、第11章では、見世物的展示場としての20世紀の蠟人形館の様子が示される。中でもマダム・タッソーの蠟人形館の評価の変化は興味深い。19世紀本物らしさ

を追求することで多くの人々を魅了し絶大な人気を博したこの蠟人形館に対し、20世紀初め「アーティスト」達は反発した。さらには文筆家さえも距離を置く憂き目を見るが、第2次大戦後「アーティスト」の反応を尻目に娯楽の場として発展し続け、現在は世界各地に開館され多くの人々を楽しませている。

第12章の「実物どおりに着彩された等身大の人形」研究史では、20世紀後半より蠟細工の研究が手がけられるようになり、その保存の重要性も認められるようになった様子が窺える。

最終章に以下のような記述がある。

「製作者が「製作している」のは「正確さ」だけではない。「説得力」、そして「迫真力」を彼らは創造しているのである」

「「アーティスト」の戦略から「実物どおりに着彩された等身大の人形」が美術的でないとして排除されようとも、人々は「見たい」ということである。そして人々は安心して「実物どおりに着彩された等身大の人形」を見て、驚き、声をたて、笑い、また記念写真を撮って、にぎやかに「見物」を楽しむのである」

「実物どおりに着彩された等身大の人形」に対して、正当な評価を求める著者の熱い思いが伝わる。

著者の熱意を持って、この分野に多くの研究者が注目し、新たな道が開けるよう、読者の一人として著者に「応援」の気持ちを捧げたい。